

雨あがりの街

常盤新平

筑摩書房

雨あがりの街

一九八一年一月三十一日 第一刷発行

著 者 常 盤 新 平

発行者 布川角左衛門

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話東京 (〇三九) 七六五 (営業)

(〇三九) 六七二 (編集)
振替東京六〇四二二三 郵便番号一〇一一九一

印刷所 三松堂印刷

製本所 矢嶋製本

©1981 S.Tokiwa Printed in Japan

雨あがりの街*目次

I 街の風

- 夏型人間・5 背広一着・6 喫茶店で・7 ホテルに一泊・8 う
つとしい眺め・9 白いテトロンのシャツ・10 定年後の父・11 本
当の看板娘・12 住みにくい・13 歩く・14 心ならずも・15 好漢
・16 春の女神たち・17 髪の苦勞・18 このやりきれなさ・19 海
外旅行・20 桜が散って・21 わが「兵隊」・22 母の日・23 金曜
日の夕方・24 ネクタイ一本・25 犯人コロンボ・26 六月の街・27
情けない話・28 電車のなか・29 ボーナス・30 夏競馬・31 行き
つけの本屋・32 身体を大切に・33 ロング・ホット・サマー・34
ライターの流行・36 好きなもの・37 愚弟・38 緊張の夏・40 反
省・41 白いスカート・42 失格者・44 同窓会・45 中年の証拠・
46 花嫁の父・48 月曜日の朝・49 因果応報・50 友人・52 休日
の朝・53 心優しい男・54 理髪店で・56 いなかもの・57 ある女
たち・58 選挙・60 十六歳・61 歩行者天国・62 金の世の中・64
いつもの年末・65 初夢・66 涙もろい男・68 ないものねだり・69

片かなの英語・70 天下の若者・71 冬眠願望・73 さっぱりした気分・74 父と娘・75 古本屋・76 勉強・78 市井の人たち・79 街の風・80 恩師・81 お土産・83 一枚のキップ・84 天皇賞・85 連休・87 五月の朝・88 コーヒー・89 ダービー・91 変な陽気・92 六月の花嫁・93 鳥たち・95 儀式・96 電気屋・97 深夜の楽しみ・98 恐怖映画・100 ひとりごと・101 この夏・103 老婆・104 夏休み・106 北海道・107 初秋・108 友あり・110 睡眠・111 アンビヴァレンス・112 パプ・114 同期の涙・115 ニューヨーク・116 遅れた男・118 安い買物・119 郊外のタクシ―・120 苦笑・122 上司・123 十七歳・124 十二月・126 夢のまた夢・127 早起き・128 歳末・130 鉄道大バザール・131 学生・132 保育園・133 ボルサリーノ・135 母のこと・136 すごい人・137 翻訳・139 命がけ・140 趣味・141 映画館・143 横書き・144 春は・145 辞典・147 皐月賞・148 兄・149 八時の空・151 喫茶店・152 巨人ファン・153 アメリカ・155 本当のこと・156 五月の終わり・157

II 好きな人たち

- 街について・161 ネクタイについて・164 休日について・167 郷里について・171 美少女について・174 昼食について・177 生き甲斐について・180 親父について・183 万年筆について・186 夏について・190 歳月について・194 わが未来について・197 就職について・200 五月について・203 お金について・206 床屋について・209 要領について・212 ボーナスについて・215 不満について・218 七月の朝について・221 中年について・224 家について・227 つきあいについて・230 進退について・233 暑さについて・236 戦後について・239 羞じらいについて・242 庭について・245 喫茶店について・248 世俗について・251 悪い男について・254 送別と決意について・257 好きな人たち・260 日曜日の愚行・263 友人と先輩・266 借金・269 同窓会・272 風邪・275 買い物・278 年の暮れ・281 いやな世の中・284 ある正月・287

III 娘の腕時計

- 銀座のスノーピー・ 293 夏の女たち・ 299 プレスト・フラッシング・
 303 さまざまの感慨・ 307 不様な男・ 311 三年前の夏・ 313 男と女・
 317 娘の腕時計・ 319 燐寸とライター・ 323 ネクタイのこと・ 325 懐
 中時計・ 327 朝食と昼食・ 331 ホテル・マンスフィールド・ 334 春の
 脚・ 336 美しくも哀しく・ 339 新居祝い・ 342 娘について・ 346 翻訳
 の仕事と辞書・ 350 賭けについて・ 353 夏の汗ばんだ素顔・ 356 金曜
 日の夕方・ 364 誕生日の贈物・ 367
- あとがき・ 371

雨あがりの街

表紙装画・太田洋三

I

街の風

毎日新聞連載「男の気持」より

夏型人間 * '76年1月4日

髭の濃い同僚がいた。風邪で一週間寝たとき、びっしりと、しかも長く伸びたやつを理容師のバリカンで刈ってもらったという男である。電気カミソリでは、朝に剃っても、お昼にはうつすらと顔が黒くなる。冬になると、てきめんに遅刻が多くなった。

「髭だよ、この貧乏髭。寒くてね、よく蒸さないと、うまく剃れないんだ」と彼はよくぼやいていた。三十分早く起きたらいいじゃないか、という私の言葉に、同僚は情けなさそうに首をふるのだった。

「この髭ばかりは、髭のない人にその苦勞がわからない。見てごらんさい、髭を伸ばしているのは、髭のうすい連中ばかりだから。それに、ぼくがこの寒さ、厳しい冬に三十分も早く起きられる人物だったら、もっと出世します。ああ、早く夏が来ないかなあ。夏の、あの髭剃りあとの爽快な気分！」

どうでもいいことだが、サラリーマンには夏型と冬型があるのではないか、と私は以前から思っていた。

背広一着 * 1月9日

古い背広を着ると、肩が重くなって、気分が滅入ってくるといことがあった。雨の日がとくによくない。繊維にたまったほこりやちりで、背広がずっしりと重くなる。洗濯すればするほど、重さが増してくるようだ。

男の顔なんて大して変わらないと思ってきた。美醜、好き嫌いの差はあっても、仕事に影響しないのではないか。そこで、身だしなみを大切にしたいようになってくる。

新調の背広を着たときの、あの、妙に晴れがましい、なんとなく面映ゆい気持は、ちょっと捨てがたい。ついでに、シャツやネクタイも新しいと、なおいいのだが。仕事にも意欲がわいてくる。

考えてみれば、じつに他愛ない。たかが背広一着で、みっともない話だ。古い背広を重く感じるのも、その男がやる気をなくしていたからかもしれない。しかし、新調の背広はささやかな楽しみである。私は会社に勤めていたころ、そういうささやかな楽しみを知ってよかったと思っている。

喫茶店で * 1月16日

喫茶店でコーヒーについてくる、あのちっぽけなミルク入れは日本人の発明なのだろうか。あれは一体何と呼ぶのか。物資のなかった時代のなごりではないかという気もする。そのミルク入れすらなく、ボーイやウェイトレスから、ミルクは入れますかなどと言われると、こんな店にはいるんじゃないかと後悔してしまう。何もそこまでケチケチしなくてもいいではないか。

コーヒーの味はまるっきりわからないほうだ。喫茶店でコーヒー以外の飲物を注文するのが、何か釈然としない（値段が高い）ので、ついコーヒーを飲むことになる。

たまには紅茶にするかと思うことがあるけれど、家に帰れば、ありがたいことにお歳暮でいただいたのが飲みきれないほどある。レモンスカッシュやココアは女が飲むものと決めてきた。毎日一度は喫茶店でコーヒーを飲む。これはもう、息抜きではなく、生活である。

ホテルに一泊 * 1月23日

週休が二日になってから、月に一度ホテルで一泊するようになった。金曜日の夕方、定時に仕事をすませて、ホテルに行き、シャワーなんか浴びてから、外出して、ビールで夕食をとる。夏には、うまくすると、富士山のかなたに沈む真っ赤な夕日が、ホテルの窓から見えて、モウカタと思うことがある。

夕刊を買ってホテルにもどると、ルームサービスのコーヒーを飲みながら、テレビを見るか、本を読むかして、早めに寝る。翌朝の起床は七時ごろだ。運がよければ、スモッグにかすむ富士山がぼんやりと見える。朝食はルームサービスでコーヒーとトースト。ホテルのコーヒーだけは安くておいしい。

ホテルに泊まるとき、いつも考える。酒場で飲んだり、マージャンで負けることを考えれば、安いものだ。月に八日も家にいるのは、どうにもしんどい。ぜいたくな気もするけれど、髭をそり、バスをつかって、ホテルを出るとき、豊かさと空しさが心に残る。

うつとうしい眺め * 1月30日

駅へ行く途中の坂道に、一流校へまかりとおる、と仰々しい看板をかかげた学習塾がある。そのとなりがいつもうるさい音楽教室だ。

昔は、樹木が生い茂り、清水が流れる窪地だった。夏になると、子供たちがよくセミやカミキリムシやカブトムシをとっていた。

いまはマンションがそびえたち、学習塾があり、音楽教室がある。夕方、そこを通って帰るとき、大勢の小学生や中学生に会う。うつとうしい眺めである。

先日、ラジオの子供向けの番組で、中学生が質問していた。塾へ通いたいけれど、両親が許してくれないので、どうしたらいいか。すると、その番組の回答者は力をこめて、中学生をさとしたのである。塾なんかに行かなくともいいと言ってくれるなんて、きみのお父さんとお母さんは素晴らしいじゃないか。

タクシのなかで、この放送を聞きながら、腹だたしいことであるけれど、塾に行かぬ娘を持つ私は不覚にも、胸が熱くなった。